

地域共同体とともに歩む教師を育てる —木田宏思想にもとづく国語科教員育成構想—

大嶽和好, 森 洋子, 助川幸逸郎

岐阜女子大学 文化創造学部

(2021年12月1日受理)

A plan for to grow up teachers who can contribute to develop local communities — Educational programs of Japanese-Language teacher based on Hiroshi Kida's philosophy —

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

Kazuyoshi OTAKE, Yoko MORI, Koichiro SUKEGAWA

(Received December 1, 2021)

Summary

Being in the age of globalization, we need to strengthen a local unity for keeping public welfare. In this paper, Authors show a plan for training of Japanese-language teachers who contribute to develop local communities, learning from the educational philosophy of Hiroshi Kida. Kida was an official of Ministry of Education and a leading figure of educational policy in the post WW 2 era. He donated most of his documents and writing works for Gifu women's university. Authors suggest programs of to grow up teachers strongly connected local communities, embracing those Kida materials.

○「土着性」はもはや無用の長物か？

「グローバル化」という単語をことあるごとに目にし、耳にする。そういう状況が出来してから久しい。

たとえば、ハリウッド映画はもう20年近く前から、アメリカ国外での売りに頼りきりである。このため、かつてはしばしばスクリーンに登場した「非欧米人の極悪ボス」は登場させにくくなっている(それをやって、アジアやイスラム圏で不評を買うのが怖い

だという)¹⁾。

あるいは、本年(2021)のショパン国際ピアノコンクール。優勝したブルース・シャオユー・リウはパリ生まれで、国籍はカナダ、両親はともに中国人である。彼の文化的バックボーンを、いずれか一国に帰属させるようと試みても、徒労に終わるだけだろう。

文化を語るに際し、「国家」を基本の単位

1) 片田暁「ハリウッドに発想の転換を求めさせた、海外市場の重要性」(『ハリウッドビジネス10年の変遷』竹書房 2014・4)

とする。そうした枠の構えかたが時代おくれだという認識は、初等・中等教育の現場でもすでに常識化している。高等学校学習指導要領・地理歴史編には、「グローバル化」という単語が溢れんばかりに踊る。冒頭の「改訂の経緯」と題された節がまず、次のように始められる。

「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、急速に変化しており、予測が困難な時代となっているのである」²⁾

さらに、新設科目である「地理探究」の要点が6つ並ぶなかに、「グローバルな視座から求められる自他文化の尊重と国際協調」という項目が挙げられている³⁾。「国家」を孤立したユニットとして立てて地歴を教えることは、現在では「禁忌」なのである。

「国家」という枠組みが、かつてのような重みを失った。この事実は、否定しようもない。しかし、それを「ローカルなもの」全般の価値低下と短絡させるのは、明白な誤謬である。

身体が何に、どのように接触したか。それによって感染症の広まりかたが変わる。私たちはそのことを、昨年(2020)以来のコロナ禍で改めて思い知った。ウイルスの伝播は、インターネットによっては起こらない。そして、不幸にしてウイルスを宿してしまった場合、生身の肉体がどこに置かれるかによって救命確率が変わる。自分が直接かかわる人び

との行動がどのように規制されているか、自分が搬送されるはずの病院で医療崩壊が起きていないか——そのような「ローカルな問題」が、私たちひとりひとりの死命を決する。この状況を、グローバル化はいささかも揺るがさなかった。

ローカルなもの結びつきが深いのは、医療や公衆衛生だけではない。グローバル化に適切な価値観は、短いスパンの経済合理性にとらわれがちだ。それらは、即座に利潤につながらないものをおしなべてムダ扱いする。結果、介護・教育・文化事業といった領域に資金や人材がまわりにくくなる。このとき生じる弊害を、いかに緩和するか——この難題を解決するうえで、「地域共同体を基盤とする共同性」に期待される役割は小さくない⁴⁾。

グローバル化の波が、国家という壁を砕こうとする。そのような時代だからこそ、生活を守る拠点として地域共同体は重責を担う。この事実には、私たちはこれから向きあわなければならない⁵⁾。

2) 『高等学校学習指導要領 地理歴史編解説』(文部科学省 2018・7 2021・8一部改訂)ただし、傍点は引用者による。

3) 注3に同じ。ここでも傍点は引用者による。以下、「歴史探求」の意義を説明した箇所をはじめ、「グローバル化」という語がくりかえしこの指導要領には姿をあらわす。

4) マイケル・サンデルはいう。「公正な社会は、ただ効用を最大化したり選択の自由を保障したりするだけでは、達成できない。公正な社会を達成するためには、善良な生活意味をわれわれがともに考え、避けられない不一致を受け入れられる公共の文化をつくりださなくてはならない。」ここからサンデルは、「同胞愛」や「宗教的連帯」を包摂する「共通善」の考察におもむく(『これからの「正義」の話をしよう』鬼澤忍訳・早川書房 2010・5 ※原著は2009)。功利主義的な道徳観、あるいは、個人の自由を最大化させようとする旧来型リベラリズム。これらよって、現代社会の課題を解決できない。そのような認識に立脚して、サンデルは、コミュニティの新たな可能性をさぐっていく。

5) 2010年前後から、「ご当地アニメ」・「ローカルアイドル」が話題にのぼるようになった。こうした風潮は、グローバル化にともない、「国家より小さく身近な共同体」の意味が増したことを基盤としている。この問題については、助川幸逸郎「私はなぜ新海誠作品を好きになれないのか？」(志水義夫・助川幸逸郎編『君の名は。』の交響』ひつじ書房 2017・7)を参照。

○岐阜女子大学・国語教育コースの使命と木田宏思想

地域共同体の存在意義を見つめなおす。現代社会がかかえるこの課題に、地方大学という立場を生かして応えていく。岐阜女子大学がいま、第一に果たすべき使命はおそらくそこにある。

だとすれば、本学国語教育コースは、何をめざして学びの場を組織していけばよいのか。

ことばを媒介に、地域共同体の紐帯を深める。そういう仕事を、学校を拠点としながらも、学校という垣を越えて推し進める国語科教員。その育成を、私たちは目標として掲げたい。

この目標を具体化するについて、岐阜女子大学には大きなアドバンテージがある。戦後教育を領導していた文部官僚・木田宏⁶⁾にかかわる教育資料を、岐阜女子大学図書館は所蔵している⁷⁾。

学校という場を、青少年の教育のみをおこなう機関にとどめたくない。成人をもふくめた、地域共同体全体の核となる存在にしてゆきたい——そうした理想を、木田は有していた。木田の思想・構想は、本学国語教育コースがめざす人材育成にとって指針となる。私たちが育てていきたい国語科教員、その具体

的な姿を、木田の教育資料は指ししめす。

木田という「身近な先達」に倣う。それを実践することで、岐阜女子大学で国語科教員育成にあたる私たちは、迷いなく前進していけるはずだ。

○木田宏が目指した教育の姿と、そこから導かれる教師の理想像

それでは、木田宏の教育思想とはどのようなものだったのか。その骨子は、以下の四点到にまとめられる。

- 一：学校は、主体的存在として、地域共同体のニーズに応じていかねばならない⁸⁾
- 二：教育は、青少年に学びの機会をあたえるだけでなく、文化全般に貢献しなくて

8) 「それはやはり地元の人のそういう動きで自分達の地域の子供たちを教育するには、どのくらいのか規模がいいかという発想から進めるべきですよ。(中略) その子供の教育にどうしたらいいかということを考えていくのが教育の施策の出発点であって。それは集まってみたら何か20人以上一斉に扱うのは難しいことになります。そもそも適正規模はないと思います。それをどうするか考えるのが教育であって、東ねてやろうという意識は本来ならば違うのだ。行政ということから考えますと、それは全てが上から舵を取ってこう東ねて、という発想になっています。本来教育ということを考えたら、一人であろうと数名であろうと、そこに合ったようにどうするかという発想でものを考えないといけない」(岐阜大学・パナソニック教育財団・岐阜女子大学編『木田宏オーラルヒストリー』岐阜女子大学 2012・11 pp 50-51)

「例えばこの前もここで申し上げたと思いますが、カリキュラムの問題といたら本来カリキュラムというのは学校で自分たちが決めて作っているものだ。そう考えなければならないのに、カリキュラムというのは文部省でどこかに決まっていると学習指導要領に書いてある。あれをどうやって現場へ移すかが、カリキュラムの指導行政だと思っているのです。これは少なくとも教育委員会や戦後の教育改革をやる時の発想は全く逆です」(『木田宏オーラルヒストリー』 pp 56)

6) 木田宏は、1922年生まれ。1946年文部省入省。社会教育局長、大学学術局長などを経て、1976年事務次官。1978年に退官のち、国立教育研究所長、新国立劇場運営財団理事長などを歴任した。2005年没。

7) 岐阜女子大学図書館には、木田宏本人から寄贈された、大学時代のノート、著書、戦後の帝国議会の審議記録(教育基本法関連)、教科書、教育委員会、高等教育などの教育関連資料が10000点以上所蔵されている(木田文庫)。また、木田宏からの聞き書きをまとめた『木田宏オーラルヒストリー』も岐阜女子大学から刊行されている。

はならない⁹⁾

三：断片化した知識の詰めこみは不毛であり、全体的な見とおしの獲得が学修には伴わねばならない¹⁰⁾

四：教育は、社会人をも対象とし、生涯にわたって行われていくものである¹¹⁾

身近な他者との共棲の場としてのコミュニティ、その有機的全体のなかで、たしかな役割を担っていく学校——木田がめざしていた

9) 「それで教育委員会というのは本来教育委員会法を作り、これを地方教育行政に切り換える時に教育というのは何だという非常に幅広いので、文化まで入りますよということにしてあるのです。ところが教育委員の人にもその自覚はないし、それから反対側の方も文化は教育委員会がというのじゃ具合が悪い。知事や何かが非常に熱心に文化の仕事をしてくれ、事実上は文化というのは教育委員会の主唱であるにもかかわらず、今、中途半端なのです。それは、教育委員会というものがどういふ仕事をどういふふうにするものかということについて、教育委員会の委員も職員も認識がなさすぎる。教育委員会というのは学校委員会だという意識が強すぎるのです。それはまさに学校が仕事の重みから言っても8割か9割ぐらいを占めてしまうということはあるんですけど、今日の時世を考えますとこれは大変具合が悪いのです。本来、教育委員会というのはもう少し文化、学術、全部を広めて教育、文教のことを担当してくれるければ困る」(『木田宏オーラルヒストリー』 pp 55)

10) 「だからね、何というか、歴史の先生に聞いてみたら、世界史が山川出版のやつが一番良くて、これは一番単語がたくさん入ってる。(中略)だから、今度は(入試問題を)出題する、出すほうの先生はね、山川出版を見てれば一番出題の範囲が広くなると。片一方のほうはそれに追っ掛けて一生懸命勉強してればいいというので、高校で一番売れているのは山川出版の「歴史」だ、「世界史」だと。嫌になるじゃあないですか。(中略)だから、あれじゃ、「歴史」は本当はみんなが読まないことになるし、それは学校が終わったら忘れてしまうということになりますよね」(『木田宏オーラルヒストリー』 pp 20) 木田は、初等・中等教育についてだけ「知識の断片化・タコツボ化」を危惧していたわけではない。高等教育も、学際的なひろがりのあるものへと、現状を変えていこうとしていた。大阪大学に人間科学部を設置した折の構想を、木田は次のように語る。「そこで人間諸科学というのをまとめて一括りにしようじゃないか。

ものは明確である。教育が、青少年を抱えこんで社会から孤立したゲッターになる。そのことを何よりも木田はおそれていた。

こうした学校観・教育観を、アメリカ占領軍との交渉にあたりながら木田は鍛えあげていった。その過程には、戦後思想史的一幕としても見すごせない意義がある。が、この点の探求は、別稿に譲ることとし、ここでは「木田の理想を体現した国語教師」のありようを具体的に考えたい。

教育を核にするけれども心理学、社会学、それから沢潟先生のような方に医学から来てもらって、人間が育つということを考えようではないか。そこで、そういうのをひっくるめて文学部から社会学と心理学をひっばすわけです。文学部に歴史文だけを残すということにしよう。

文学部というのはその時に初めて私もわかったのですが、学生の数と教員の数が阪大は1対1なんです。贅沢なところだなと思いました。ですから文学部の権威が高くて教育学部なんかちやちやなものと、こういう意識だった。それを私は大変大事なことだと。文学部長が要するに心理学、社会学と一緒にさせて人間全体を考える学部にしましょうということ、今の阪大の人間科学部という構想を作ったのです」(『木田宏オーラルヒストリー』 pp 90)

11) 「最近のようにインターネットだとか何とかって情報化だとか何とかって言われて、そこに犯罪がどうなるかなんていったらそれは大変ですよ。どこまでが保護すべき著作権領域であるのか何であるのか、そこからの泥棒になるのか、大変難しいですよ。そういう世の中の動きに司法官がどんどん対応していけるようになっていないといけませんね。そういう意味では大学が法学教育といたら昔の民法と刑法だけやっていたらいいというのでも困ってしまう。それは民法、刑法の基礎の上にもう少しこういうことをやってもらうとか無体財産権をどうするとか、これは相当真剣に広げてもらわないといかん。それが高校から来てやろうというのが大体無理ですね。(中略)だからどうしたってそれぞれ特色のある大学院を作り、専門を広げて、大人がいつでも来れるような大学にならないと嘘なんですよ。あれは子供の学校でね、というのでは、それは大学と言えなくなってしまふ」(『木田宏オーラルヒストリー』 pp 125-126) アカデミックな学問は「若き秀才」にもできる。しかし、それを社会に応用する営為は「大人」の知恵がないとむずかしい。それゆえ、アカデミックな知を社会に活かす方法は、「大人」が研究し、開発すべきだと木田は考えていた。

私たちは、四点に集約した木田の教育思想から、「理想の教師の条件」を以下のように抽出した。

- あ—赴任先の地域的特色や文化伝統を踏まえた学びを組織できる（木田思想の要点「一」に対応）
- い—赴任先の文化施設や市民グループと協働し、授業以外の場でも文化を発信できる（木田思想の要点「二」に対応）
- う—他教科の教員と協働し、科目を越えた総合的学習を計画・運用できる（木田思想の要点「三」に対応）
- え—文化イベントなどを通じ、赴任先の住民に幅ひろくはたらきかけるとともに、自身も生涯にわたって学びを継続できる（木田思想の要点「四」に対応）

公立学校の教員に採用された場合、ひとつの現場に生涯、留まることはありえない。異なる風土を持った赴任先を、何か所か渡りあるのが通例である。まずはそれぞれの任地になじみ、勤務する学校が根をおろすコミュニティに参入する。そして、「そこにしかない伝統」を肌で知り、それによって得たものを学びの場に反映させる——こうした仕事ができなければ、赴任先の共同体固有のニーズには応じられない。「あ」を条件にあげたゆえんはここにある¹²⁾。

地域共同体の人びととつながり、そこに脈打つ伝統をからだで理解する。そのうえで、

- 12) 私立学校に勤務する場合でも、地域共同体の特質を知り、そこに馴染むことは必須である。また、ひとたびある私立学校に採用されたからといって、定年までそこに留まるとはかぎらない（複数の学校を経営する法人に採用された場合、別の系列校に移動になるケースもある）。「様々なコミュニティに適應する力」は、私立、公立を問わず「教員がそなえるべき資質」なのである。
- 13) こうした教員を養成できるならば、本学の国語教育コースが文化創造学部¹³⁾に設けられている意義をひろく示すことにもなるはずだ。

教室から踏み出した文化事業を実践する。このとき、教員の有する専門知識や授業技術は、一般社会にはたらきかける武器となる。条件「い」を充たす教員はこの武器を使いこなし、幅広い層と協働して「コミュニティの文化」を創造していく¹³⁾。

そのようにして「コミュニティの文化」に貢献するには、みずからの有するスキルを、大局的な見地からとらえる力を必要とする。それなくして、異なるディシプリン¹⁴⁾の持ち主と連繋することは難しいからだ。そして、別領域の専門家と組むことができない教員は、学校の内側でも、総合的な学びを組織することは叶わない。これでは、「いま、求められる教育」を実践することは不可能である。条件「う」をそなえなければ、これからの教員は任務を果たせない。そのことは、様々な意味においてあきらかである。

そして、成年に達した人びとに意義あるはたらきかけをするには、教員自身が生涯、学びつづけなければならぬ。条件「え」を教員が肝に銘じなければ、学校は「未成年者のゲッター」に墮する¹⁴⁾。

14) 戦後の社会教育がうまく機能しなかった理由について、木田はこう語る。「……社会教育というのは要するに学校の先生が回って来て、教えることが社会教育だというふうに思っているものですから、まあ大人をひつつかまえて、戦後の啓蒙運動じゃないけれども、いつまでも説教をしてくれるわけですよ、社会教育で。(笑) そうしますと、それがだんだんと昭和20年、30年と学校教育が普及して大人になっていく人の方が、それは学校の先生の説教なんかよりははるかにいい知識を持って、自分で進んでいるところへ一生懸命になって教えようとかかるものですから、社会教育というのはますます嫌われて、うまくいかんという矛盾をいろいろと考えておりました」(『木田宏オーラルヒストリー』pp 148)。社会に出て、「学校の外」で経験を積んだ人間の認識を顧みない。また、そうした認識の持ち主を前にすることに畏れをもたず、教壇に立つ以前に知りえた領分に安住する。こうした構えを捨てないかぎり、教員は「生涯学習」に貢献することなど覚つかない。その現実を、木田の証言は明確にしめている。

以上、木田宏の教育思想に立脚した理想の教師像について考察してみた。次いで節をあらため、そうした理想に合う国語教師をどうすれば育成できるか、その検討に赴きたい。

○「理想の国語教師」を育てるために——岐阜女子大学国語教育コースが、未来に向けて取り組むこと

地域共同体とともに歩む国語科教員——木田宏の教育思想に立脚し、そのような人材の育成を目指す。岐阜女子大学国語教育コースはそこにむけて、どのようなカリキュラムや授業内容を用意すべきなのか。この点について詳細を論じるには、本稿の紙数はかぎられている。よって、構想の大枠のみをここでは示すことしたい（具体的な実践方法については、いくつか別稿を用意し、そのなかで説いていく予定である）。

A：「赴任先の地域的特色や文化伝統を踏まえた学びを組織する力」をどのように養うか

作品の舞台になった土地の風土・そこに住む人びとの暮らしをこまかく調べる。そしてそれを作品解釈にフィードバックして授業にいかす方法を身につけさせる。

具体的には、本学と関連の深い地域が登場する文学をテキストとして取りあげる。そこに描かれた土地の姿を、その土地の来歴や地理と対照させ、作品とそこに現れた土地、双方に対する理解を深めさせる。

たとえば国文学史の授業において、「すのまたと文学」というセクションを設けることを私たちは考えている。『更級日記』・『東関紀行』・『なくさめ草』といった中古・中世の紀行作品に描かれた墨俣についての記述を、まずは詳細に分析する。ついで、墨俣がこの

ように「旅文学」において頻繁に語られる理由を、歴史や地形を視野にいれながら考察する。ここまで座学をすすめたところで、受講生とともに墨俣でフィールドワークを実施する。

セクションの締めくくりとして、司馬遼太郎『新史太閤記』の「墨俣の一夜築城」の部分を全員に読ませる。墨俣城を秀吉が一夜にして築いた。この挿話は今日では虚構だとされている¹⁵⁾。しかし、こうした「神話」が生まれ、近年まで語りつがれてきたことには、一定の必然性がある。それが何であるのかについて、受講生を4名ほどのグループにわけ、相互討議をさせる。討議をしていくなかで、ロイロノートなどのICTツールを活用させる¹⁶⁾。墨俣が宿す「物語空間」としての可能性に、それぞれの受講生が覚醒することをゴールとしたい。

B：赴任先の文化施設や市民グループと協働し、授業以外の場でも文化を発信できるようになるために何が必要か

たんなる「文学講座」ではない、隣接領域に踏みこんだ「文化イベント」を組織・運用する力。その養成が、地域共同体の多彩な成員とともに、幅ひろく文化を発信するうえで必須であろう。

15) 藤本正行・鈴木真也『偽書『武功夜話』の研究』（洋泉社 2002・4）

16) たとえば、Yチャートやベン図をもちいて、「墨俣がこうした挿話の舞台となった理由」・「一夜築城が虚構であったとしても一定のリアリティをもった原因」・「墨俣一夜築城説話成立の母胎」の相互関係を整理させる。

ICT機器の活用は、学校の外の一般社会ではかかわらずに進んでいるとはいえない。ロイロノートなどを使いこなせるようになり、それらを導入したコミュニケーションの可能性をひろくつたえる——この点においても、学校教員が地域共同体に貢献できる余地がある。その意味からも、国語教育コースの授業でも積極的にICTをもちいていきたい。

そうした力を体得させることを目的に、私たちは次のような授業を計画した。

梶井基次郎の『器楽的幻覚』を、近代文芸作品研究の授業内で読ませる。この作品に描かれたピアノ・コンサートは、1925年に帝国ホテルで開かれたジル・マルシェックスの公演に材を採っている。このときマルシェックスが弾いた楽曲のラインナップを紹介し、当時のフランス音楽受容状況を説明する。マルシェックスが1925年に奏でた何曲かは、日本初演であった。それらのいくつかを授業内で聴かせ、1925年に日本人聴衆が受けた衝撃を可能なかぎり再現する。そのうち、講義内容を基にした解説と、ピアノ生演奏を組み合わせたレクチャー・コンサートの企画案を作成させる。

あるいは、次のようなプランもあためている。現代文芸作品研究で、『楽園のカンヴァス』、『たゆたえども沈まず』などの原田マハ作品を取りあげる。原田は、絵画をテーマにした小説の書き手として知られる¹⁷⁾。そこに登場する美術についての考証を、受講生に分担して行わせる。そのうえで、「原田マハと名作絵画たち」という展覧会の企画案を、期末レポートとして提出してもらう。そしてそれらを、実現可能性などもふくめて授業最終日に相互批評させる。最後に「最優秀企画案」を選出して、半期の授業全体を締めくくる。

C：どうすれば、他教科の教員と協働し、科目を越えた総合的学習を計画・運用できるようになるか

他分野の専門家とコラボレーションする力を養う。そのための修練を積む機会として、私たちは「平安朝文学のなかの猫」という授

業を立案してみた。

猫が登場する平安朝の文学作品としては、『枕草子』9段、『源氏物語』若菜上・下巻、『更級日記』がある。これらについて、まず国語教育コースの教員が概要を解説する。次に、平安時代の貴族社会における猫の飼育状況について、日本史の専門家がレクチャーする。これにつづけて生物学を修めた講師が、平安貴族が珍重した「唐猫」と、在来種のちがいをテーマに授業をおこなう。

その後、前近代の日本における猫信仰について、受講生からレポートを提出してもらう。そして、三人の教員がそれぞれの立場から、特徴あるレポートに対する講評を授業内でおこなう。

専門分野を異にするエキスパートが、おなじテーマについて語る。その姿を学生たちに見せることで、科目を越えた総合的学習の具体的なイメージを植えつけられるにちがいない。

こうした国語・日本史・生物コラボの授業は、2年次配当の授業で実施するべきだと私たちは考える¹⁸⁾。古典文学通論が、これをおこなう科目としておそらく最適だろう。

D：「赴任先の住民に幅ひろくはたらきかけるとともに、生涯にわたって学びを継続する姿勢」をいかにして身に着けさせるか
執筆者のひとりである助川は、現在、大学院通信課程で10名を越える学生の修論指導をおこなっている。

他の学生にたすけられたり、刺激をうけた

18) 小学校免許と中学・高校国語科一種免許の双方を取得する学生が本学には多い。そうした学生は、三年前期に小学校、中学校のいずれかに教育実習に行く可能性がある。ここに述べたようなコラボ授業の実例を、私たちとしては教育実習以前に体験させておきたい。指導案を考える幅が、それによって飛躍的にひろがるのが期待できるからである。

17) 『楽園のカンヴァス』にはルソーとピカソが登場し、『たゆたえども沈まず』はゴッホを中心に物語が展開する。

りする。そういう機会が、大学院レベルの高度な研鑽においてこそ欠かせない。それだけに、修士課程の勉学を通信教育でつづけることには困難がともなう。

こうした事情を考慮して、助川は半期に一度、通信制大学院のゼミ合宿をオンラインで開催している。このオンライン合宿を、学部
の国語科教育法受講生にも視聴させる。通信制院生との交流の時間も設定し、「働きながらの学び」について、学部生たちが具体的にイメージできるように図る¹⁹⁾。

遠くない将来、岐阜女子大学の学部にも通信教育課程が設置されることが見こまれる。その新学部や、大学院通信課程で卒業後も学ぶ。そうした意欲を持ってもらううえで、通信制院生との接触はプラスになることだろう。本学が今後すすむべき方向を開拓する意味でも、「生涯学習への関心」を学部生に植えつける意義は大きいだろう。

○岐阜女子大学の伝統と、本論の構想

岐阜女子大学には、県外からも多くの学生が入学してくる。そうした学生のなかには、無論、そのまま故郷を去って就職する例もすくなくない。

ただし本学は、いったん地元を離れて資質に磨きをかけ、卒業後にUターンして生地に貢献する生き方も推奨してきた。そうした伝統をもつ教員養成機関は、全国的に見てもまれであろう。地域共同体とともに歩む教師像。それを掲げることは、岐阜女子大学のこれまでの取りくみから新たな独自性を引き出す道ともなる。

積みかさねてきた足場の上に未来を築く。そのためにも私たちは、木田宏の遺産と真摯に対話し、新たな実践方法をそこに見いだしていかなければならない。

19) 通信制の大学院生は定職に就いているケースが多い。このため、オンラインであっても、平日の昼にゼミを実施することは不可能である。休日にZoomでゼミを開催し、そこに学部生も参加してもらうことを私たちは想定している。